

論文 Article

広島城出土の金箔鯨瓦についての考察

佐藤大規¹

Consideration on the Pair of *Shachihoko* pasted with Gold Foil, Excavated from the Hiroshima Castle

Taiki SATO¹

要旨：鯨は頭が龍（もしくは虎）で体が魚という想像上の霊獣で、火伏せの霊験をもつという。鯨は鎌倉時代に唐様建築とともに中国から伝来したもので、寺院本堂内の厨子の大棟などに木製のものが用いられた。城郭建築で鯨を用いた初例は、天正四年（1576）築城開始の織田信長の安土城と考えられる。

ところで、平成二十年（2008）十二月に広島市に所在する広島城三の丸跡の井戸から、目・耳・牙・鰭など部分的に金箔を押しした鯨瓦が、ほとんど完全な形で出土した。全体や細部の形状から毛利氏時代の十六世紀末期に制作されたと考えられる。完形品としては現存最古の鯨瓦で、安土城に初めて鯨瓦が用いられてから間もない時期に制作されたもので、初期の鯨瓦の形状を知る上で貴重な事例と言える。

また完形品であるため、今後、発掘調査などによって同時期の鯨瓦片が見つかった際に、部位の同定や年代の推定を行うための基準になるもので、その価値は高い。

キーワード：鯨瓦、広島城、城郭、桃山時代

Abstract: A *shachihoko* is an imagination animal with dragon (or tiger) head and the fish body. The figure of *shachihoko* was transmitted from China in Kamakura period with the architectural style *karayo*, and the wooden ones were used on the top of the roof of *zushi* (a miniature of Buddhist architecture to enshrine a Buddhist image). Oda Nobunaga used *shachihoko* made of tile to the buildings of a castle for the first time in Aduchi in 1576.

By the way, a pair of *shachihoko* that were not broken were excavated from the well of the Hiroshima castle in December, 2008. They were pasted with gold foil on eyes, ears, fangs, fins and so on. It is thought from the whole shape and the details that they were produced at the end of the 16th century. They are valuable to know the initial shape of *shachihoko*, because they are the oldest *shachihoko* in almost complete shape.

In addition, they are valuable as the standard to identify of the part and presume at the age, when splinters of tile are excavated.

Keywords: *shachihoko*, hiroshima castle, castle, Momoyama period

I. 緒言

鯨は頭が龍（もしくは虎）で体が魚という想像上の霊獣で、火伏せの霊験をもつという。鎌倉時代に唐様建築とともに中国から伝来したもので、寺院本堂内の厨子の大棟などに木製のものが用いられた。城郭建築で鯨を用いた初例は、天正四年（1576）築城開始の織田信長の安土城と考えられる¹⁾。安土城以後は、各地の城郭のみならず、寺院建築にも瓦製の鯨が用いられ、近年では民家の大棟にも載せられるようになった。

ところで、平成二十年（2008）十二月に広島市に

所在する広島城三の丸跡の井戸から、目や鰭など部分的に金箔を押しした鯨瓦が一对、通常の鯨瓦が一对の合計二対が、ほとんど完全な形で出土した（図1）。井戸の中に丁寧に重ねて置かれていたという状況から、投棄されたのではなく何らかの儀礼の一環として埋納されたと考えられる。

全体や細部の形から毛利築城時（十六世紀末期）のものと推測され、完形品としては現存最古の鯨瓦と考えられる。また、目や鰭など部分的に金箔を押ししている点が、安土城出土の鯨瓦と共通しており、初期の鯨

¹ 広島大学大学院文学研究科；Graduate School of Letters, Hiroshima University

瓦の形式を知る上で、貴重な事例となるものである。

本稿では、広島城において出土した鯨瓦のうち金箔鯨瓦の形状について、安土城以前の中世の木製鯨や安土城出土の鯨瓦と比較分析を行い、その特色及び価値を明らかにしたい。

II. 広島城出土の金箔鯨瓦の概要

1. 広島城の沿革

毛利輝元は、吉田郡山城から居城を移すべく、天正十七年（1589）四月に広島城の築城を開始した²⁾。その前年に上洛した輝元は、豊臣秀吉の大坂城や聚楽第を訪れたことで、旧式な山城であった吉田郡山城に替わる新城の建設の必要性を感じたと考えられている。

天正十九年正月には、輝元が入城できるほどまで工事は進んだ³⁾。文禄元年（1592）四月には、肥前名護屋へ向かう途中の秀吉が立ち寄り「御殿」などを見てまわり、大変感心したと伝えられている⁴⁾ことから、おおよそ城の体裁は整っていたと考えられる。文禄・慶長の役のため築城工事は遅れがちであったが、文禄二年には石垣が完成⁵⁾、慶長二年（1597）には新しい殿舎が完成し、輝元の移徙が行われた⁶⁾。

天守の建築年代は諸説あるが、『知新集』によると慶長四年正月に築城竣工の祝いがなされている⁷⁾。また文禄元年の秀吉の来城時に天守について何も記されていないのでこの時には完成していなかったと考えられる。すなわち、天守の完成は文禄元年四月から慶長三年の間と考えられる。天守は城郭において中心的建造物であるので、その完成をもって築城工事の竣工とするのが自然と考えられるので、ここではその下限をとって慶長三年頃完成したとしておく。

慶長五年の関ヶ原の戦い後、周防・長門二カ国に滅封された毛利輝元に替わり、尾張清洲から福島正則が広島城に入った。福島正則は、入城後、間もなく西側の外郭を新造し、櫓を築くなど積極的に拡張工事を行った。元和元年（1618）の武家諸法度発布後は拡張工事は途絶したが元和三年の洪水による破損部位について、元和五年になり幕府に無断で修築したことを咎められた際には、毛利時代に築かれた本丸上段の櫓や石垣などを破却したとされている（三浦，1995）。しかし結局は、同年に改易となり、替わって浅野氏が広島城に入り、そのまま明治維新を迎えた。

明治になり二基の小天守や数多く存した櫓などほとんどの建物が破却されたが、天守及び東渡櫓（東廊下）・本丸中御門・二の丸表御門・多門櫓・太鼓櫓が残っていた。しかし、昭和二十年（1945）八月六日に投下された原子爆弾によって天守は倒壊し、そのほ



図1 広島城出土の鯨瓦
写真：三浦正幸氏撮影

かの建物は焼失してしまった。その後、昭和二十八年に本丸・二の丸跡が史跡に指定された。また昭和三十三年に天守が外観復元され、平成八年（1996）には、二の丸表御門・平櫓・多門櫓・太鼓櫓が復元された。

2. 金箔鯨瓦の概要

ここでは、まず広島城で出土した金箔鯨瓦の概要を述べる。なお、金箔鯨瓦は二口（本稿では、便宜上、甲と乙と記し区別することにする。）があるが、ほとんど共通した作りになっている。そのため、相違点のみを述べることにした。

甲（図2）

高さ（下端から尾鰭の先端まで）は、二尺二寸（約六十七センチ）で、目から尾鰭までを一体で作った胴部分、さらに鼻・上顎の顔部分と左右の下顎部分の四つの部材から成っている。顔部分の鼻の上側に二箇所、下顎部分の下から出る牙の上側に左右とも一箇所に穴が開いているが、これは、大棟に取り付ける際の釘穴と推測される。なお胴は、後世の鯨瓦の例からして野棟木から出した木芯に固定していたと考えられる。

まず胴部分について述べる。目は白目部分に金箔を押し、黒目は穴を穿って表現している。この穴は内部まで貫通していない。目の周囲には、眼窩の高まりを示すような鋭い縁どりがある。その上に接して眉がある。耳は外部に金箔を押し、内部は下地の朱漆のままである。耳穴は内部まで貫通して開けられている。眉間には鬚が三筋あり、一番下のみ欠失している。



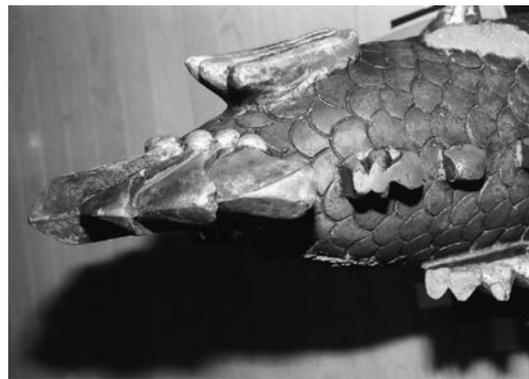
1 目・耳



2 胸鰭



3 蛇腹



4 尾鰭 (上から)



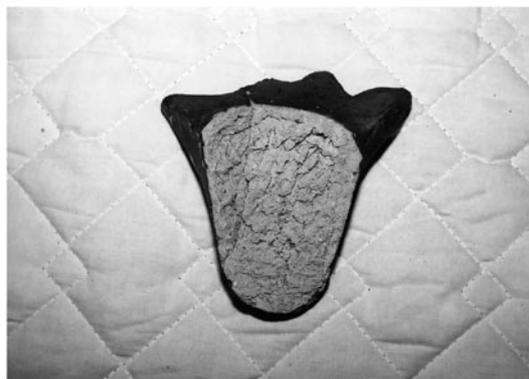
5 尾鰭



6 頭部分



7 下顎 (左)



8 鰭裏面

図2 鯢瓦 (甲)
写真: 三浦正幸氏撮影

棘は、腹に四本、背中に三本あり、いずれも金箔が押されている。胸鱗は左右とも四筋に分かれている。また側面には左右上下に一枚ずつ、すなわち四枚の鱗が付く。下鱗は五筋に分かれ、上鱗は四筋に分かれている。また腹には三筋に分かれた尻鱗が一枚だけ付く。これらの鱗には、いずれも金箔が押されている。胸鱗以外の鱗は整形したものを胴体に貼り付けていたと考えられ、鱗と胴体の接着面には接着力を増すために溝が彫られている。腹は下から四分の一ほどを立体的に作りだした蛇腹としている。蛇腹は三段に分かれていて、金箔が押されている。尾鱗は扇を開いたような形をしており、七筋に分かれている。中央部分は、剣先のように鋭く尖っている。また尾鱗の筋数に合わせるように尾の付け根には、連珠が左右ともに七個付く。尾鱗、連珠ともに金箔が押されている。このように連珠が付いた鯨瓦は例がない。

胴全体には、鱗がへら描きで表現されている。この鱗は正確な円弧で青海波のように彫られており、専用の定規のようなものを使って彫ったと考えられる。また鱗の接着面にまで鱗が彫られている箇所があることから、鱗を貼り付ける前に鱗を描いたと考えられる。ただし、鱗にまで鱗が彫られている部分もあり、鱗を貼り付けた後に、描き足した部分もあったと考えられる。

次に顔・顎部分について述べる。鼻は獅子の鼻のようである。鼻孔の周縁を高く盛り上げ、それとは別に小鼻を被せるように鋭く作り出す。正面向かって左側のみ鼻孔の縁に朱漆が塗られている。また鼻の両脇には瘤のように盛り上がった部分がある。鼻梁の皺は四筋である。

髭は筍のような形をしていて太い。へらを押して筋のような縞模様を付けているので、あるいはとぐろを巻いたような螺旋状態を表現している可能性もある。上顎には前歯と歯が二本ずつ、奥歯が四本ある。また下顎には左右それぞれに鋭く尖った長い歯が一本、奥歯が二本ずつある。これらの歯と歯は、前歯以外いずれも金箔が押されている。口唇と大きく張り出した口脇には朱漆が塗られているが、この朱漆は、金箔を接着するための朱漆よりも赤味が濃く、顔料の種類が異なると推測される⁸⁾。したがってこの鯨瓦は、目・耳・歯・歯・棘・蛇腹・鱗といった金箔を押した部分、口唇と口脇といった朱漆を塗った部分、そして何も塗っていない部分に塗り分けられている。

乙 (図3)

高さは二尺三寸八分(約七十二センチ)で、胴の厚みは一寸五分で、最も厚い箇所(蛇腹下部)は二寸五分あり、後世の鯨瓦よりもかなり厚い。甲と同じく胴・

顔・左右下顎部分から成る。下顎部分の牙上部には、釘穴と考えられる穴が開いているが、顔部分に穴はなく、大棟に固定する方法は胴部と下顎部との継手の重なりのみであって構造上で心許ない。

目は白目部分に金箔を押し、黒目部分は穴を穿って表現している。この穴は、内部に貫通していない。耳の外部は金箔が押され、内部は朱漆である。耳穴は内部に貫通して開けられている。眉間の鬚は三筋ある。

棘は、背中に三本あるが尾に近い箇所は欠失している。また腹の棘は、胴体が多数の瓦片に割れてしまっているため、今回の調査では、棘の有無や数を確認することはできなかった。なお背中の棘は、すべて金箔が押されていた。腹は下から四分の一ほどを蛇腹としている。蛇腹は立体的に作り出され、五段に分かれており、金箔が押されている。胸鱗は四筋に分かれており、金箔が押されている。側面の鱗は左右上下に一枚ずつあり、下鱗が五筋、上鱗が四筋に分かれていて、いずれも金箔が押されている。尾鱗は扇を開いたような形をしていて、七筋に分かれ、中央は剣先のように鋭く尖る。また尾の付け根には、連珠が七個付いていて、尾鱗とともに金箔が押されている。また胴全体には、へら描きで表現された鱗がある。

鼻は獅子鼻で、向かって右側の鼻孔に朱漆が塗られている。しかし、甲が明らかに片方のみ朱を塗っているのに対して、乙はもう一方にも僅かであるが朱漆が塗られている。鼻梁の皺は五筋あり、さらにその上部に盛り上がった瘤がある。

髭は細く、付け根付近で一度巻いた後、後方に延びる。上顎には前歯が二本、歯と奥歯が四本それぞれある。また下顎には左右それぞれに鋭く尖った歯が一本、奥歯が二本ずつある。前歯以外は、いずれも金箔を押している。甲と同じく口唇と口脇には、濃い朱漆を塗っている。

なお、乙は多数の瓦片になっているので、断面を確認することができるが、尾鱗に近い部分は、頭に近い部分に比べ生焼けの状態であった。これは胴体を一体で作っていることと胴体の厚みが厚いことが相俟って、十分に火が通らなかったためと考えられる。また染炭が不十分であったため、内部の尾鱗に近い部分は、色が白いままであった。

相違点

二口の鯨には、相違点が幾つか見られるので、それらを記しておく。まず甲は高さが二尺二寸なのに対して乙は二尺三寸五分と、一寸八分ほど乙のほうが大きい。また蛇腹は甲が三段なのに対し、乙は五段である。鼻梁にある皺の数も異なり、甲が四筋であるのに対し



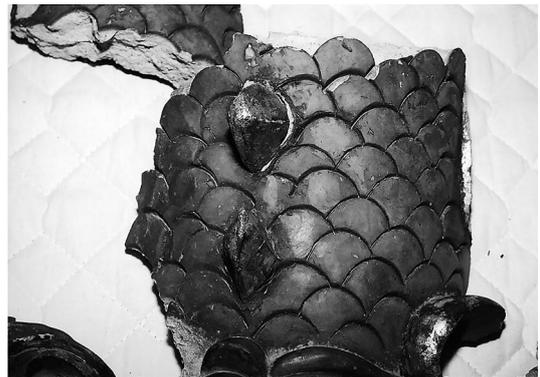
1 胴体部分



2 目・耳



3 胸鱗・蛇腹



4 棘(背中)



5 尾鱗



6 内部



7 顔部分



8 下顎部分(左)

図3 鯨瓦(乙)
写真:三浦正幸氏撮影

て乙は五筋となっている。また乙のほうが鼻梁が長く、その分だけ顔が長くなっている。

次に形状の違いであるが、まず甲の髭は、太く短いが乙のそれは細く長い。また眉の大きさも甲が耳の下端まで届くほど長いのに対して、乙の眉は耳に接する間際までしかなく短い。さらに乙には、鼻の両側に瘤がない。上顎にある牙は、乙より甲のほうが太いが乙には上顎の中程に甲にはない牙がある。尾鰭は、双方とも七筋に分かれているが、甲はどの筋にも鎬がある。それに対して乙は、中央から左右に二筋ずつは鎬がなく平になっている。

金箔を施す箇所にも違いが見られる。蛇腹は一段一段が三角形のような山形をなしているが、甲は一番上の段の上側以外すべてに金箔を押しているのに対して、乙はすべての段で下側にしか金箔が押されていない。すなわち乙は、金箔と黒の部分交互になっている。また鼻孔の縁に朱漆を塗っているが、甲は向かって左、乙は向かって右に塗っている。

以上のように二口の金箔鯨瓦には、大きさだけでなく形状や配色に違いが見られた。万延元年（1860）に尾張藩士の奥村徳義が名古屋城についてまとめた『金城温古録』⁹⁾によると、名古屋城天守の金鯨は、北が高さ八尺五寸、南が高さ八尺三寸で、北のほうが大きく鱗や蛇腹の数も異なっている。名古屋城の金鯨には雌雄の区別があるというが、広島城の鯨瓦も同様の区別があった可能性が考えられる¹⁰⁾。

Ⅲ. 中世の鯨と安土城出土の金鯨

1. 中世の鯨

安土城以前、すなわち中世における鯨の例は、管見によると以下の十五例がある（図4）。

法道寺多宝塔二重目肘木（正平二十三年〔1368〕・大阪府）・大法寺観音堂内厨子大棟（南北朝頃・長野県）・医王寺本堂内厨子大棟（応永二十二年〔1415〕・愛媛県）・白山神社本殿向拜丸桁こうはい がぎょう（応永三十二年〔1425〕・長野県）・摠見寺三重塔かえるまた 臺股（享徳三年〔1454〕・滋賀県）¹¹⁾・大善寺本堂内厨子大棟（文明五年〔1473〕・山梨県）・定光寺本堂内須弥壇架木（明応二年〔1493〕・愛知県）・法隆寺北室院本堂向拜木鼻（明応三年〔1494〕・奈良県）・光明寺本堂内厨子大棟（明応七年頃〔1498〕・神奈川県）・正法寺観音堂内厨子大棟（十五世紀後期・愛媛県）・薬師堂内宮殿大棟（天文六年〔1537〕・群馬県）・大恩寺念仏堂内厨子大棟（弘治三年〔1557〕・愛知県）¹²⁾・土佐神社本殿向拜持送もちおくり（元龜二年〔1571〕・高知県）¹³⁾・西田中神社羊宮神社本殿向拜木鼻（十六世紀中頃・和歌山

県）・禅蔵寺薬師堂内厨子大棟（十六世紀末・愛媛県）

以上に挙げた鯨の例は、いずれも木製の彫刻で、大棟の両端に載せるほかに、肘木・丸桁・臺股・木鼻・架木・持送など様々な部位に用いられている。大棟に上げられたものは、すべて厨子や宮殿といった堂内にあるものばかりである。外部に使われた例としては、法道寺多宝塔や白山神社本殿・摠見寺三重塔などのように肘木や桁・臺股で、大棟に載せた例はない¹⁴⁾。

鯨の表現は様々であり、医王寺のように鱗を彫らず比較的簡略的に作られたものもある。また尾鰭の形も大別すると、扇を開いた形（六例）と二股に分かれた形（六例）の二種類がある。江戸時代の鯨瓦の尾鰭は、二股のものが一般的である。それに対して中世は、十五例中六例も二股とはならない例があることや、摠見寺三重塔臺股のように二つの例が同居していることからしても、未だ鯨の形状に決まった形がなかったと考えられる。

2. 安土城の金箔鯨瓦

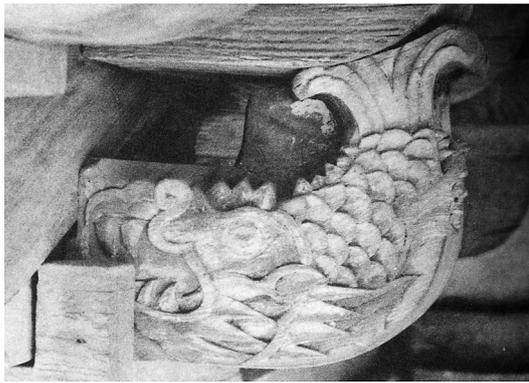
安土城の沿革

『信長公記』によると、織田信長は天正四年（1576）正月、近江国安土山に、丹羽長秀（惟住五郎左衛門）を総奉行、木村治郎左衛門尉を普請奉行、岡部又右衛門を大工頭とし築城を開始した¹⁵⁾。天正七年には天主が完成し、天正九年の七月には天主や城内に存した摠見寺に提灯を吊って盆を祝い¹⁶⁾、八月には馬揃が行われた¹⁷⁾。また九月には築城工事に携わったと考えられる工匠に小袖が与えられ¹⁸⁾、天正十年の正月には、諸国の武将が安土城を訪れ、一部の者は金で装飾された「御幸之御間」等を見学している¹⁹⁾。以上のことから、この頃には天主のみでなく、そのほかの建物も完成していたのであろう。

しかし、天正十年六月二日、信長が明智光秀に京の本能寺において襲撃され亡くなると、その後の混乱のなかで安土城は炎上した²⁰⁾。

その後、賤ヶ岳の戦い、小牧・長久手の戦いを経て秀吉が天下人としての地位を固めると、信長の孫の三法師は安土城から坂本城に移され²¹⁾、安土城は築城開始からわずか九年あまりで廃城となった。江戸時代を通じて荒廃したままであったが、城内に存した摠見寺は焼失を免れており、山中に新たな石垣を築くなどの改造も行われた。安土城跡そのものは、荒廃してはいたが、多くの人に注目されていたらしく、種々の絵図²²⁾ が作られている。

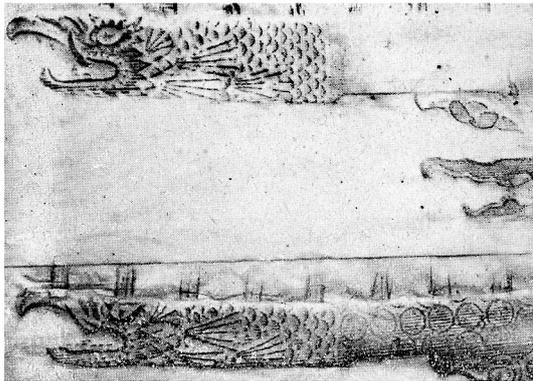
その後、明治維新を経た大正十五年（1926）に安土城跡は史跡に指定された。そして昭和十五、十六年



1 法道寺多宝塔



2 医王寺本堂内厨子



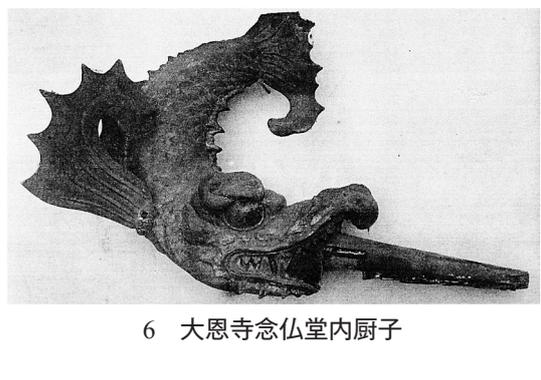
3 白山神社本殿



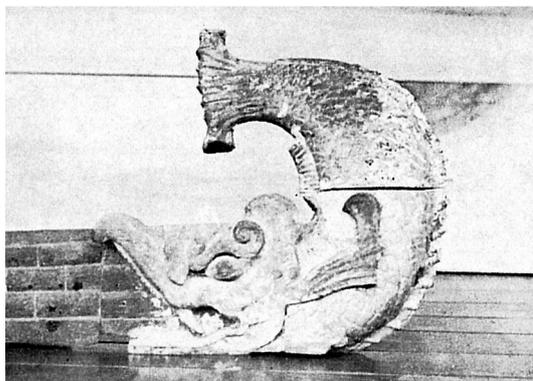
4 摠見寺三重塔



5 定光寺本堂内須弥壇



6 大恩寺念仏堂内厨子



7 光明寺本堂内厨子



8 羊宮神社本殿

図4 中世の鯨

出展：1 重要文化財法道寺修理委員会編（1970）：『法道寺食堂・多宝塔修理工事報告書』， 3 天沼俊一（1946）：『続成蟲樓隨筆』，高桐書店，
6 重要文化財大恩寺修理委員会編（1953）：『大恩寺念仏堂修理工事報告書』， 7 平塚市文化財保護委員会編（1960）：『平塚市文化財調査報告書』第二集， 8 文化財建造物保存技術協会編（2004）：『西田中神社羊宮神社本殿・八幡神社本殿修理工事報告書』
写真：2・4・5 三浦正幸氏撮影

(1940, 41)には天主台の穴蔵および本丸御殿跡の本格的な発掘調査²³⁾が行われ、昭和二十七年に特別史跡に指定され現在に至る²⁴⁾。

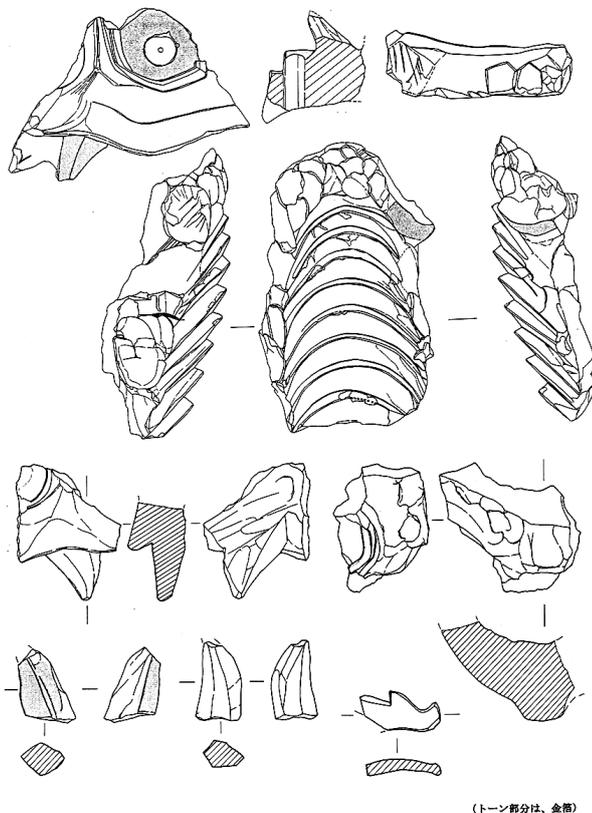
金箔鯨瓦の概要 (図5)

発掘調査報告書²⁵⁾によると金箔鯨瓦は天主北東方下段の伝米蔵跡で出土した。いずれも破片で、左目から上牙、上唇と前歯二本、下顎、腹部蛇腹、牙、鬚などが見ついている。主に顔を中心とするもので、目・牙・歯・鱗に限って金箔が施されていたと考えられている。また鱗は、へら描きやU字型のスタンプを押したのではなく、一枚ずつ粘土板を貼り付けた立体的なものであった²⁶⁾。また鱗は胴体に貼り付けられたもので、江戸時代の鯨瓦のような柄差しではなかった。これらの破片から全体を復元した結果、高さは約二尺七寸になると考えられている。

天主が焼失時にどの方角に倒れたかは定かでないが、少なくとも東側、すなわち伝米蔵の方向ではないことが、天主の東側にある伝本丸御殿跡から天主の遺物と考えられるものがほとんど発掘されていないことからわかる。また、復元される鯨の高さが小さなこと²⁷⁾からしても天主のものとは考えにくい。付近に存した櫓

あるいは櫓門などに上げられていたものと考えられる。

櫓などの格の落ちる建物にまで鯨が上げられていたと考えられること、岡山城天守や広島城天守をはじめとする後世の天守には必ずと言っていいほど鯨が上げられていることから、当然安土城天主にも鯨が上げられていたと考えられる。また発掘復元された鯨は目など部分的に金箔が押されたものであったが、それは格の落ちる建物に使用された鯨であったことを考慮すると、天主という城郭の主となる建物に使われた鯨は、それよりも高級であった可能性が高い。慶長五年以前に作成されたと考えられる「大坂城図屏風」に描かれた豊臣大坂城天守の鯨は、全体が金色である。また、「江戸城図屏風」によると寛永度江戸城天守は金、そのほかの櫓などは黒と区別している。安土城では天主は金、そのほかの建物は、部分的に金としたものという区別をしていた可能性を否定することはできない。なお、「大坂夏の陣図屏風」は、大坂夏の陣後に絵師の記憶や伝聞によって描かれたと考えられ、すべてを信用することはできない(佐藤, 2006)が、この屏風では、天守の鯨は金で塗るが、そのほかの建物の鯨は、黒で塗ったものと黒に金で筋を引いたものがある。



1 実測図



2 復元模型

図5 安土城出土の鯨瓦

出展：1 安土城郭研究所編(2004)：『図説安土城を掘る』，サンライズ出版， 2 滋賀県教育委員会(1998)：『特別史跡安土城跡発掘調査報告』八巻

IV. 鯨瓦の制作年代

広島城出土の鯨瓦には、銘文など制作年代を知る資料がないので、全体や細部の形状およびほかの鯨と比較することで推察するよりほかない。

まず金箔を施す部位に着目してみる。広島城の鯨瓦は、目・耳・牙・歯・棘・蛇腹・鱗といった立体的に作り出された部分に金箔を押し、顔面や鱗といった比較的平坦な部分には金箔を押し、黒いままである。このように部分的に金箔を押しした鯨瓦の例としては、天正十年頃までに完成した安土城から出土した金箔鯨瓦がある。すでに述べたようにこの鯨瓦は目・耳・牙・歯・棘・鱗に金箔を押し、蛇腹に金箔を押ししていない点は異なるものの、金箔を施す箇所は広島城の鯨瓦とほぼ一致している。木戸雅寿氏によると、このように部分的に金箔を押しした鯨瓦は、発掘調査によって岐阜城や清洲城などでも見つかっているが、麦島城を除いていずれも関ヶ原の戦い以前の古いものである（木戸、2006）。

また安土城と広島城の鯨瓦は、鱗と胴体を一体で作るのも一致しているが、鱗を安土城が一枚一枚を作り出しているのに対して、広島城はへらで描いており、簡易的になっていることから、安土城よりは年代が降ると考えられる。

次に、前述したように広島城の鯨瓦の尾鱗は、扇を開いたような形をしている。それに対して江戸時代の鯨瓦の尾鱗は、二股に分かれているものが一般的である。管見によると尾鱗が扇を開いたような形をしている鯨は、城郭建築では丸岡城天守と佐倉城大手門の二例しかない。また国宝・重要文化財に指定されている寺院建築においても、慈眼院金堂と崇福寺大雄宝殿の二例しかなく、江戸時代における鯨瓦の尾鱗は、二股に分かれたものが一般的であったと言える。

それに対して、中世に作られた木製の鯨は、前述したように扇を開いた形のもの二股に分かれたものの二種類が混在しており、未だ鯨の形状が定まっていなかったと考えられ、広島城の鯨瓦の尾鱗は、中世の形状を残していると推察される。また江戸時代の鯨瓦のように胴体を上下二分割せず一体に作っていることは、内部に生焼けの部分を残すという不都合を生じさせており、古拙と言える。

以上のように、広島城の鯨瓦は、安土城の鯨瓦の影響を残し部分的に金箔を押ししていること、鱗が胴体と一体に作られていること、鱗がへら描きであること、尾鱗が扇を開いたような形であることなどから、その制作年代は毛利氏時代の十六世紀末期、すなわち広島城の築城が開始された天正十六年から竣工祝いが行わ

れた慶長四年の間としてよいであろう。

これまで、制作年代が確定している鯨瓦で最も古いものは、寛文三年（1663）銘がある伝大洲城天守の鯨瓦であるが、広島城の鯨瓦はそれよりも約七十年ほど古いもので、鯨瓦が作られるようになってから間もない古式な鯨瓦と考えられる。

V. 鯨瓦が上げられていた建物

城郭建築において鯨は、天守・櫓・櫓門に上げられた。広島城の鯨瓦の高さは、二尺二寸（甲）と二尺三寸八分（乙）である。戦前の実測図によると、広島城天守の鯨瓦は三尺五寸である。鯨瓦の大きさは、それが上げられる建物の規模に合わせて作られていたと考えられるので、毛利氏が天守を創建した当初と鯨瓦の大きさに違いはあまりないはずである。したがって、この鯨瓦が広島城の天守の大棟に置かれていた可能性はなく、櫓もしくは櫓門に用いられていたと考えられる²⁸⁾。佐賀城鯨の門の鯨は高さが二尺六寸であり、広島城の鯨瓦と同程度の大きさであるので、この鯨瓦が櫓もしくは櫓門に上げられていたと考える証左となろう。

VI. 結語

以上のように、広島城から出土した鯨瓦は、目・耳・牙・歯・棘・蛇腹・鱗というように部分的に金箔を押ししたもので、鱗と胴体を一体で作っていることや鱗をへらで描いていることなどを考え合わせて、毛利氏時代の十六世紀末期に制作されたものと考えられた。本丸上段に存した櫓もしくは櫓門に上げられていたと考えられ、福島正則によって破却された際に下ろされ、その後井戸に埋納された可能性を指摘した。

完形品としては現存最古の鯨瓦で、天正七年頃に安土城に初めて鯨瓦が用いられてから間もない時期に制作されたもので、初期の鯨瓦の形状を知る上で貴重な事例と言える²⁹⁾。

また完形品であるため、今後、発掘調査などによって同時期の鯨瓦片が見つかった際に、部位の同定や年代の推定を行うための基準になるもので、その価値は高い。

【注】

- 1) 滋賀県教育委員会（1998）：『特別史跡安土城跡発掘調査報告』八巻，50p. を参照。なお、安土城出土の金箔鯨瓦については、後述する。
- 2) 「山縣源右衛門覚書」広島市役所編（1960）：『新修広島市史』第七巻。
同年（天正十七年）四月十五日二宮太郎右衛門奉行にて御鋏初。（括弧内、著者）

- 3) 「佐世元余嘉書状」. 広島市役所編 (1960): 『新修広島市史』第七卷.
來正月八日廣島被御下向候條。
- 4) 「安国寺惠瓊外二名連署起請文」(毛利家文書一〇四一). 東京大学史料編纂所編 (1997): 『大日本古文書』毛利家文書之三, 東京大学出版会.
急度致言上之候, 一昨日十一至廣嶋被成御着座候, 各氣遣仕候之處, 東の箸御入口より, 御氣色よく候て, 侍町其外被及御覽, 地取似合たる與被仰出候, 御堀きハより一御門を御入候て, 甲丸兩所御覽候て, 城取之様躰, 思召候より御仰天候, 左候て, 御殿へ御あかり, 内外共悉御覽候て, 御感心不斜め候。
「豊臣秀吉朱印状」(毛利家文書八七五). 東京大学史料編纂所編 (1997): 『大日本古文書』毛利家文書之三, 東京大学出版会.
今日_上至廣嶋被成御着座候, 路次中御泊々御座所御茶屋以下迄, 被入念候段, 非大形候, 殊更廣嶋普請作事様子被御覽候, 見事_上出來, 輝元_上似相たる模様, 被感思召候。
- 5) 『知新集』第二十五卷. 広島市役所編 (1959): 『新修広島市史』第六卷.
文禄元年辰年同二巳年までに御城御普請石垣成る。
- 6) 「毛利氏奉行人書状」(厳島野坂文書一二二一). 広島県編 (1976): 『広島県史』古代・中世資料編二.
一, 爰元御新宅江昨日御遷居候。
- 7) 『知新集』第一卷. 広島市役所編 (1959): 『新修広島市史』第六卷.
此夜西白鳥町に綱引あり, 其ゆゑよしハ, 廣島の城つくりける時繩はりなどに用ひし繩をひらひあつめ, 城とゝのひけることふきとて其繩を引あひしか慶長四年のけふ (正月十四日) なりしよりおこれりとなり。(括弧内, 著者)
- 8) 使われている顔料の違いは, 赤外線検査を行わなければ判明しないが, 金箔を接着するための朱漆, すなわち金箔によって守られ, 劣化しにくい朱漆のほうが口唇や口脇の朱漆より明らかに色が薄いため, 種類が異なっている可能性を否定することはできない。
- 9) 『金城温古録』第十二之冊 御天守編之四. 名古屋市教育委員会編 (1965): 『名古屋叢書』続編 第十三卷.
- 10) ただし, 『金城温古録』などの史料には雌雄について記されていない。したがって明治以後の俗説である可能性もある。
- 11) 現状では, 向かって左側の鯨は欠失している。
- 12) 鯨に「弘治三年」の銘文が残り, 制作年代が明確にわかる事例であったが, 平成六年に念仏堂とともに焼失し, 現存しない。
- 13) 向拝や妻飾の虹梁に若葉の彫刻があるが, 虹梁に若葉の彫刻が施されるようになるのは, 十七世紀からで, 十六世紀に若葉の彫刻を施した例はない。したがって, 現本殿の
建立年代が下がるか, 江戸時代に大改造が行われ, 取替材が多いという可能性が考えられる。
- 14) なお, 国宝及び重要文化財に指定されている建造物のうち, 慈眼院本堂 (文永八年 [1271]・大阪府)・鏝阿寺本堂 (正安元年 [1299]・栃木県)・善光寺本堂 (南北朝頃・大分県)・明王寺釈迦堂 (天文二年 [1533]・香川県)・円教寺金剛堂 (天文十三年 [1544]・兵庫県)・盤台寺観音堂 (元亀頃・広島県)は大棟に瓦製の鯨を載せている。しかし, 鯨瓦の耐用年限は百年ほどと考えられるので, 当初のものは一つも残っておらず, いずれも江戸時代以降のものと考えられる。また, これらの建造物の屋根に当初から鯨が載せられていたかどうかは定かではない。これまでの鯨の研究は寺院建築の鯨を取り上げていない。江戸時代の寺院建築の鯨と合わせて考察する必要があるが, 紙幅の都合上, 稿を改めて述べることにしたい。
- 15) 『信長公記』天正四年正月条. 奥野高広・岩沢愿彦校注 (1969): 『信長公記』角川書店.
正月中旬より江州安土山御普請, 惟住五郎左衛門に仰付けらる。
『信長公記』「安土御天主之次第」
御大工棟梁岡部又右衛門, 漆師首刑部, 白金屋, 御大工宮西遊左衛門, 瓦唐人一観二仰付, 奈良衆二焼せらる。御普請奉行ハ木村二郎左衛門。
『安土日記』. 宮上茂隆 (1977): 安土城天主の復原とその史料に就いて (上) (下), 『国華』, 九九八・九九九号, 朝日新聞社.
御大工岡部又右衛門, 御普請奉行ハ木村二郎左衛門。
- 16) 『信長公記』天正九年七月十五日条
安土御殿主, 并に惣見寺に挑灯余多つらせられ。
- 17) 『信長公記』天正九年八月朔日条
五機内隣国の衆, 在安土候て御馬揃。
- 18) 『信長公記』天正九年九月八日条
御小袖皆々に下さる, 人数の事, 狩野永徳・息右京助, 木村次郎左衛門・木村源吾, 岡辺又右衛門・同息, 遊左衛門・子息, 竹尾源七, 松村, 後藤平四郎, 刑部, 新七, 奈良大工, 諸職人頭々へ御小袖余多拝領させられ, 何れもゝ忝き次第なり。
- 19) 『信長公記』天正十年正月朔日条
正月朔日 隣國之大名小名御連枝之御衆各在安土候て御出仕有。
- 20) 『兼見卿記』天正十年六月十五日条. 斎木一馬・染谷光広校訂 (1976): 『史料纂集』第四・第一, 続群書類従完成会.
安土放火云々, 自山下類火云々。
『フロイス日本史』五十六章 (第二部四十一章). 松田毅一・川崎桃太訳 (1978): 『日本史』5, 五畿内編Ⅲ, 中央公論社.
しかしデウスは, 信長があればほど自慢していた建物の思い

出を残さぬため、敵が許したその豪華な建物がそのまま建っていることを許し給わず、その明らかなお知恵により、付近にいた信長の御本所（信雄）はふつうより知恵が劣っていたので、なんらの理由もなく、（彼に）邸と城を焼き払うよう命ずることを嘉し給うた。

安土城天主炎上については、明智秀満放火説や城下町からの類焼説など様々な説があるが、『フロイス日本史』の記述より織田信雄放火説が有力となっている。

- 21) 『兼見卿記』天正十二年十二月五日条
五日、丁未、民部卿法印へ罷向、城介殿息坂本へ下向。
- 22) 「近江国蒲生郡安土古城図（貞享古図）」等がある。「貞享古図」は安土城内の惣見寺などに伝来する絵図で、現在城跡にある曲輪名や門名などの標石はこの図によっている。
- 23) 滋賀県教育委員会が中心となって行った発掘調査。天主跡と本丸跡の調査を行い、天主跡では礎石が発見されるなど大きな成果が挙げられた。
- 24) 近年にも発掘調査は行われており、平成元年度からの調査では伝大手道の規模や道筋が従来考えられていたのとは大きく異なることが判明するなど、大きな成果を挙げている。また調査の後には、伝大手道や伝羽柴秀吉邸跡は復元・整備が行われている。
- 25) 注1) 参照。
- 26) 木戸雅寿は、鱗の表現や金箔の押し方から鯨瓦を織田信長段階（天正四年～十一年）、豊臣秀吉段階Ⅰ期（天正十一年～十三年）、豊臣秀吉段階Ⅱ期（天正十四年～文禄五年）、徳川家康段階（慶長五年～）の四段階に分けている。それによると、鱗は織田段階は立体貼り付け、豊臣Ⅰ期はへら描き、豊臣Ⅱ期ではスタンプになるとしている（木戸、2006）。
- 27) 例えば姫路城天守の鯨の高さは、約六尺二寸である。
- 28) 三浦正幸によると、福島正則は幕府に城の無断修築とがめられた際、すなわち元和五年に本丸上段の北側を除く石垣と櫓・城門を破却したという（三浦、1995）。広島城から出土した鯨瓦は、巖島神社末社豊国神社本殿（千畳閣）

の金箔瓦と金箔の剥落振りが似通っていることから、少なくとも二・三十年間は、大棟に上げられていたと推察される。福島正則が本丸上段を破却した元和五年は、鯨瓦が作られてから、約二十年後である。このことから、この鯨瓦は、本丸上段に存した櫓もしくは櫓門のものである可能性を指摘することができる。

- 29) 大阪城跡で発掘された龍顔の瓦片も鯨瓦の頭部である可能性がある。

【文献】

- 奥野高広・岩沢愿彦校注（1969）：『信長公記』角川書店。
木戸雅寿（2006）：織豊系城郭における鯨瓦の意義。淡海文化財論叢，1，258-263。
齋木一馬・染谷光広校訂（1976）：『史料纂集第四・第一』続群書類従完成会。
佐藤大規（2006）：豊臣大坂城を描いた屏風に関する考察。日本建築学会学術講演梗概集，89-90。
滋賀県教育委員会（1998）：『特別史跡安土城跡発掘調査報告』八巻，50p。
東京大学史料編纂所編（1997）：『大日本古文書 毛利家文書之三』東京大学出版会。
名古屋市教育委員会編（1965）：『名古屋叢書続編 第十三巻』名古屋市教育委員会。
広島県編（1976）：『広島県史 古代・中世資料編Ⅱ』広島県。
広島市役所編（1959）：『新修広島市史 第六巻』広島市役所。
広島市役所編（1960）：『新修広島市史 第七巻』広島市役所。
松田毅一・川崎桃太訳（1978）：『日本史5 五畿内編Ⅲ』中央公論社。
宮上茂隆（1977）：安土城天主の復原とその史料に就いて（上）（下），国華，998-999号，朝日新聞社。
三浦正幸（1995）：石垣が語る城の歴史。広島城 歴史群像名城シリーズ9，学習研究社，58-63。
(2009年8月31日受付)
(2009年10月26日受理)